

平成14年度

第6回

V
もし

国語

注 意

- 1 問題は**1**から**6**までで、7ページにわたって印刷してあります。
- 2 声を出して読んではいけません。
- 3 答えは、すべて解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 4 答えは、**特別の指示**のあるもののほかは、各問の**ア・イ・ウ**のうちから、最も適当なものをそれぞれ**一つずつ**選んで、解答欄にその記号を書きなさい。
- 5 答えをなおすときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。

1

次の(1)～(5)の——の漢字の読みを、ひらがなで書け。

(1) 数々の名作を著す。 (2) 安眠を妨げる物音。

(3) 町村を合併する。 (4) まず問題点を把握する。

(5) そんなに卑下する必要はない。

2

次の(1)～(5)の——のかたかなの部分をも、漢字で書け。

(1) 友人にノートをかす。 (2) フタクたび挑戦する。

(3) 結論をホリユウする。 (4) ユウビに舞う。

(5) 競技場の観衆はコウブンした。

3

次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えよ。

① 注 フィジーにあるホテル・フィジアンでは、毎週水曜日と金曜日に「クラブ・レース」と呼ばれるレースが行われています。これはクラブ、つまり蟹による競走で、ホテルの宿泊客たちが、夕食後のひとときを楽しむために行われているキャンペーンです。

私も嫌いなほうではないので、滞在中はほとんど毎晩、このゲームに参加しました。儲けることよりも、純粋に勝ち負けが問題なのです。最良にしている蟹が勝つと、まるで自分が走り勝ったかのような嬉しさです。

そんなある夜のこと。私は夢をみました。フルマラソンに参加して、他の選手たちと競い合う夢です。スタジアムを出て、舗装道路を走っていくと、沿道には沢山の観戦者が群れていて、小旗を振っています。ところがそれは人間ではなく、蟹が私たちランナーを応援しているのです。蟹たちは思い思いのランナー

に、金を賭けているのでしよう。

「これは負けられない。私に賭けてくれた蟹に、一儲けさせてHなくては」と私は勢い込んでビッチを上げました。そして折り返しの標識を回ったところで目が覚めてしまい、私はベッドの上で舌打ちしました。

蟹たちに応援されて走った夢のレース。私は勝ったのでしょうか、それとも……。

(原田宗典「旅の短編集」による)

(注) フィジー＝南西太平洋の中央部、大小二百余りの島々から成る共和国。一九七〇年イギリス連邦の一国として独立。

(1) 文章中の——(A・B・G・J)の四つの「れ・られ・れる」のうち一つだけ意味・用法の異なるものがある。その記号を書け。

(2) 文章中のC「参加しました」の主語を抜き出して、一文節で書け。

(3) 文章中の——(D・E・F・I)の四つのうち一つだけ品詞の異なるものがある。その記号を書け。

(4) 文章中のHには、目下に恩を与える意味の動詞が入る。その動詞を次のA～Eのうちから一つ選び、その記号を書け。

A やら B い C あげ D ウ E くれ F 工 G もらわ

(5) 動詞の連用形が名詞となったことば(例えば「遊ぶ」という動詞が「遊び」という名詞に変わる)を、後半部分から抜き出して、四字で書け。

次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えよ。

① 近年、思考という語が一種の流行のようになった観がある。何でも思考と結びつけないと安心できない。機械的記憶を大切にしてきた反動かとも思われるが、とにかく、思考とは何か、その概念が案外はつきりしていない。

② そこで、まず、思考を二つに大別してみよう。ひとつは感覚、感じによってものごとをとらえ、判断し、結論づけているときの思考で、かりに、これを「思う」思考とする。われわれが日常、「考える」とか「思う」とか言うとき、たいていはこのタイプの思考をあらわしている。生活に即し、経験に立脚している。理論的というよりも有機的なあたかきをもっている。この「思う」思考をAタイプとしておく。

③ これに対して、もう一方の思考はより純粋な思考(注1)プローセスを経るものである。そしてこの思考には、知的、観念的、超生活的、超経験的というような修飾をつけることができる。この「考える」思考をBタイプの思考と呼ぶことにする。

④ われわれが思考と言っているのは、このA、B二種を包括するものである。このころやかましく言われる思考は、Bタイプを指しているらしいが、日常生活ではこれが意外とすくなく、たいていはAタイプの思考によってものを考えている。そう言ったからといって、も

ちろん、AタイプよりもBタイプの思考のほうが高級だというわけではない。両者の特性を無理に要約し、対照するならば、Aタイプは文学的、言語的思考と云うことができ、Bタイプは幾何学的思考だと言いうことができよう。

⑤ Aタイプの思考は日常言語を手段としている。画家が色彩と形で考えるとか、音楽家が音で考えるというようなことが言われることもないではないが、たいていの人は自分の母国語で考えている。言語教育は情操を豊かにするだけでなく、知的世界を充実することになり、思考を正確にする。

⑥ Bタイプの思考にもやはり言語が有効である。それは、言語による哲学的思索、論理的証明などの例によっても了解されるであろう。B、言語が他方では実

用的伝達的手段でもあるために、言語によるBタイプ思考はつねに純粋さがおびやかされるのも事実である。いかほど厳密に定義された術語でも、たえず使用されているうちに、意味の輪郭がぼやけ、ついには、二義的用法などを生じるようになってくる。そして、あいまいさが感じられたり、誤解を生んだりすることもないとは言えない。Bタイプ思考にとって、C ののである。

⑦ それで、Bタイプの純粋な思考は、どうしても普通の言語から脱出し、より恒常性の高い言葉に依存しようとすることになる。もっとも厳密な記号体系、もっとも

正確な言葉は数学であるから、Bタイプの思考は数学を理想的な言葉とする。数学のみならずいわゆる学問は、次第に数学という言葉に依るものが多くなってきた。自然科学はもちろん、経済学や哲学、「言語学にまで数学的思考が導入されようとしている。数学がBタイプ思考の言葉としてすぐれていることが実証されたと言わなければならない。」(外山滋比古「日本語の論理」による)

(注1) プロローグとプロセスと同じ。事の進む順序。

(注2) 包括するに一つにまとめる。

(注3) 幾何学・図形の性質や相互の関係を研究する数学の一部門。

(注4) 「義的」根本的なものとは違って重要でない。

(1) この文章から次の一段落が抜けている。

思考には「言葉」が必要である。これはAタイプ、Bタイプとも同じである。ただ、その「言葉」の解釈が問題であって、これを日常使っているいわゆる言語だけにかぎってしまうと、「思考は言葉による」という命題が成立しなくなってしまうのである。思考の言葉は、普通の言葉だけではない。もっと広く解して、およそ体系をもっている記号はすべて言葉と考えるのである。そうしてみると、言語のほかに言葉的なものがいくつも存在することに気づくであろう。

この一段落の入る位置として最も適当なものを次のA、Iのうちから一つ選び、その記号を書け。

- ア [3]段落の次
 - イ [4]段落の次
 - ウ [5]段落の次
 - エ [6]段落の次
- (2) 文章中のA、B、Cの内容を「……の……」という形で、七字で書け。
- (3) 文章中のBに入る接続詞として最も適当なものを次のA、Iのうちから一つ選び、その記号を書け。
- ア したがって
 - イ しかし
 - ウ なぜなら
 - エ すなわち
- (4) 文章中のCに入れることばとして最も適当なものを次のA、Iのうちから一つ選び、その記号を書け。
- ア 言語は限界がある
 - イ 言語は唯一の手段な
 - ウ 言語の働きの可能性は大きい
 - エ 言語ほど危険きわまるものはない
- (5) 次に示すこの文章の部分的解説のうち、**適当でないもの**を次のA、Iのうちから一つ選び、その記号を書け。
- ア 思考をA・B両タイプに分けたことは、「思考とは何か」を考えるのに役立つ。
 - イ この文章には、考える場合にどうしたらよいかについて明快に説かれている。
 - ウ 普通「言葉」と「言語」は同義語だが、筆者はこの二つを区別して使っている。
 - エ 具体的な説明は十分ではないが、思考における数学の重要性を強調している。

次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えよ。

何か大事な局面を前にして、心がさざめいたり、不安に襲われたりするとき、飛沫は決まって思い出す色がある。

不穏な空の色。

黒い濁流がうずまくような暗色。

漁に出たきりもどらない祖父と父を待ちわびた、あの夜の胸騒ぎ。

飛沫は当時まだ八つだった。祖父の白波は空を読む名人だったが、あの日の嵐は急すぎた。「神津の家は代々、命をかけて海へ身を投げ、海神さまの怒りを鎮めてきた。きっと海神さまが守ってくたさるはず。」と母は蒼ざめた唇でくりかえしたけれど、一夜が明け、何事もなかったように空がけろりと晴れあがっても、二人を乗せた船は帰らなかった。

海に神などいない。いるのは死に神だけだ。

それまで漠然と畏怖していた海がこのときはっきりと飛沫の敵になった。その敵と戦うため、父と祖父をのみこんだ海に負けないために、飛沫はその後飛込みをつづけた。

もともと飛込みは飛沫にとって日常の一部だった。白波は箸のもちかたを教えるように飛沫に飛込みを教えた。若くして綱元を継いだ父は、付近の村から後れをとっていた漁師の近代化をはかることに頭がいっぱいで、

子どものことは妻と父にまかせきりだった。

緑に萌える丘、青く薫る風、紅に、橙に、山吹に、藤色に、紺碧に、墨色に、そのときどきの空を映して絶えず変化する海の色、それが飛沫の水泳場であり、切り立つ崖が飛込み台だった。その雄大な舞台に不服はなかった。

一メートルの岩から飛べたら、つきは二メートルから。二メートルから飛べたら、三メートルから。一段アップすること、飛沫はひとつ成長した。失敗して水に打たれる痛みを知るたび、たくましくなった気がした。「危なくないの?」「恐くないの?」などと友達にきかれると、「羽虫は一生、陸にいろ。空と海はおれだけのもんだ。」と胸を張って答えた。

そんな自分にさまざまな技を覚えてくれる祖父が、かつて飛込みという競技の選手であったことを知ったのは、小学校にあがった春のことだ。寡黙な祖父は昔のこどをいっさい口にできなかったし、家族もまるでタブーのようにその手の話は避けていた。外部から入ってくる話の断片を頭で整理できる年頃になったとき、だから飛沫は初めてこの村における白波の微妙な立場を知ったのだ。

「神津のじいさんが、しょうこりもなく。」

ときおり練習中の自分たちにむけられる冷笑の意味もやっとなかった。神津白波は綱元の息子でありながら、

都会の誘惑に負けて海を捨てた。世界だのオリンピックだのと夢を見て上京し、しかし結局はその夢に敗れてこの山村へもどってきた……。

勝者はとことんもちあげ、敗者には冷たく背をむける。白波の絶頂期には村をあげての応援に乗りだした人々が、今ではこぞって掌を返していることに、飛沫は子どもながら憤りをおぼえたりもした。

祖父はそんな彼らの白い目に負けないため、帰郷後も飛沫を続けていたのかもしれない。海への挑戦を続けることで、まだ生きている自分を確認したかったのかもしれない。白波の死後、年を経るにつれて飛沫はそんな思いに駆られるようになった。

飛沫にとっての飛込みは、そんな白波から受け継いだ。そして、海に散った祖父と父への鎮魂の儀式でもあった。やがて海面を貫くたびに腰が割れるように痛むようになって、だから飛沫は飛込みをやめる気にはならなかったし、まして海を離れるなど思いもよらなかった。

あの嵐の夜から数年後、スポーツメーカー「ミズキ」の会長と名乗る男が、どこで話をききつけたのか飛沫のスカウトに訪れたときも、飛沫は東京へ行く気などさらさらなかったのだ。(森絵都「DIVE:2」より)

(注1) 畏怖(おそそ)とわくわくして近づきにくいこと。

(注2) 網元(うもと)は漁船や網を持ち、多くの漁師を使っている人。

(注3) 寡黙(わくもく)な言葉数の少ない。

(注4) タブ(たぶ)にふれてはならないこと。ここでは、言うことを避けるべき言葉。

(注5) 鎮魂(ちんこん)死者の霊を慰めしめること。

(1) 文章中に「胸を張って答えた」とあるが、そのときの飛沫の気持ちとして最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 孤独感とはかなさ　イ 喜びと慢心

ウ 自負と誇り　エ 意地とさびしさ

(2) 文章中の「その手の話の「手」と同じ意味で使われているものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 忙しくて、ネコの手も借りたいくらいだ。

イ 残念ですが、この手の品は売り切れしました。

ウ うまいこと言っちゃって、その手には乗らないよ。

エ たいへん高値で、とても私などの手には入りません。

(3) 文章中の「沖津のじいさんが、しょうこりもなく」とに省略されていることばを補うとすれば、どれが最も適当か。次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 村にもどってきて、漁にも出ない。

イ また上京しようと夢をみている。

ウ 年とってもまだ飛込みを続けている。

エ 孫に夢を託して飛込みを教えている。

(4) 文章中の「D」に入ることはとして最も適当なものを

文章中から抜き出して、五字で書け。

(5) この文章は、登場人物のどのような心情が中心に描かれているか。次のア、イ、ウのうちから最も適当なものを一つ選び、その記号を書け。

ア 飛込みの選手として成功せず帰郷した白波のくやし

イ 海で死んだ祖父と父に対する飛沫の追憶の深い思い。

ウ 祖父に白い目を向けた村人を見返したい飛沫の執念。

エ 祖父と父のために飛込みによって海と戦う飛沫の意志。

6

次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えよ。

これも今は昔、南京の永超僧都(注一)は、魚なき限りは、齋(注二)、非時(注三)もすべて食はざりける人なり。公請(注四)勤めて在京の間久しくなりて、魚を食はで、くづほれて下る間、奈島の丈六堂の辺にて昼破子食ふに、弟子一人近辺の在家にて B を乞ひて勧めたりけり。

件の魚の主、後に夢に見るやう、恐ろしげなる者ども、その辺の在家をしるしけるに、我が家しるし除きければ、尋ねぬる所に、使ひの曰く、「永超僧都に魚を奉る所なり。さてしるし除く」といふ。

その年、この村の在家、ことごとく疫をして死ぬる者多かりけり。その魚の主が家、ただ一字、この事をまぬかるによりて、僧都のもとへ参り向ひてこの由を申す。僧都この由を聞きて、被物一重賜ひてぞ帰されける。

(「宇治拾遺物語」による)

(注1) 南京ナキン、奈良。

(注2) 永超僧都エイシュウソウド、十一世紀の人。僧都は僧正の次の位。

(注3) 齋イハヒ、非時ヒトキ、僧の二度の食事のうち、午前のを齋と呼び、それ以外の食事を非時といった。

(注4) 公請コウジウ、朝廷から経典の講義などに召されること。

(注5) くつぼれて、氣力、体力がくじけて。

(注6) 奈良ナガラ、現在の京都府城陽市奈良。

(注7) 昼破子ヒルヤクシ、折箱に入れた昼の弁当。

(注8) 在家イカ、民家。

(注9) 疫イ、流行病。

(注10) 一字イチジ、一軒。

(注11) 被物カモノ、垂ツル、ほうびとしての一そろいの衣服。

(1) 文章中の **A** 食はで を現代語に訳し、**五字以内**で書け。

(2) 文章中の **B** に入る最も適当なことを文章中から抜き出して、**一単語**で書け。

(3) 文章中に **C** 夢に見るやう とあるが、その夢の内容はどこに書いてあるか。その部分を文章中から抜き出して、**始めと最後のそれぞれ三字ずつ**を書け。(句読点は含まない。)

(4) 文章中の **D** この由 とはどういうことを指しているのか。次の **A**、**E** のうちから最も適当なものを一つ選び、その記号を書け。

A 夢の中で自分の家だけしるしをつけられなかったこと。

I 夢の中の恐ろしい人たちが村に病気をはやらせたこと。

U 村の人たちが流行病にかかり、大勢の死者が出たこと。

E 病気が流行した村で自分の家だけ災難にあわなかったこと。

(5) この文章の内容の中心として最も適当なものを次の **A**、**E** のうちから一つ選び、その記号を書け。

A 永超僧都が高僧なのに特別に好んで魚を食べたこと。

I 男の夢の内容が村での病気の流行を予言したこと。

U 永超僧都に魚を奉った者の家だけが災いをまぬかれたこと。

E 永超僧都が魚をくれた男にお礼として衣服を与えたこと。